

使徒言行録 第18章1～17節

先週の礼拝で学びましたように、パウロはギリシア神話の神々を信じていたアテネの人々に向かって、17章22節でこう語りました。「アテネの皆さん、あらゆる点においてあなたがたが信仰のあつい方であることを、わたしは認めます。道を歩きながら、あなたがたが拝むいろいろなものを見ていると、『知られざる神に』と刻まれている祭壇さえ見つけたからです。それで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それをわたしはお知らせしましょう」。そう言ってパウロは、世界とその中の万物とを作られた天地創造の神を告げ知らせました。

昔の5千円札に肖像画が載っていた新渡戸稲造という人がいますが、彼も創世記1章1節、「初めに、神は天地を創造された」という言葉を読んで、天地創造の神を信じてキリスト教の信仰に入ったと伝えられています。パウロは天地創造の神をアテネの人々に示しながら、さらに17章29節でこう告げました。「わたしたちは神の子孫なのですから、神である方を、人間の技や考えで造った金、銀、石などの像と同じものと考えてはなりません。さて、神はこのような無知な時代を、大目に見てくださいましたが、今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます」。

このように、無知な時代を大目に見てくださった神様の話は、かつてパウロがこの言葉を語ったあの時代のことでなく、むしろ、今の時代の私たちに当てはまるのではないのでしょうか。人間はさまざまな形で人の言うままに願い事を聞く偶像の神々を作ってきました。そして今や、AIという人工知能を作り、人間の思い通りに使おうとしています。けれども、AIの開発者たちは、このままAIの開発を加速し続ければ、数年も経たないうちにAIが人類を滅ぼしてしまうだろうと警告しています。一方で、私たちが生きている環境は徐々にたいへん厳しくなっています。地球温暖化の影響で、今まで経験したことがないような大規模な自然災害が各地で起こっています。これまで何度も大雨に見舞われた千葉県では、過去に一度も氾濫したことがない印旛沼まで決壊して、たいへんな被害が出ています。また少し前には、ネパールで氷河が崩れ落ち、まるで映画でしか見たことのないような大災害が起こりました。にもかかわらず、世界にあちらこちらで、人と人とが互いに命を傷つけ合い奪い合う愚かな戦争が止むことなく、それどころか新たな戦争の火種さえ生まれようとしています。このような世界に警鐘を鳴らすために、国際刑事裁判、ICCは世界各国の戦争犯罪人に対し有罪判決を出していますが、このICCの働きをよく思っていないアメリカ合衆国の大統領が、ICCに対して経済的な圧力をかけていることは、みなさんよくご存じのとおりです。そんな愚かな人間たちに対して、神様はこの無知な時代を大目に見てくださっておられる。神様は、「今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じて」おられるのです。

パウロは、さらに17章31節で私たちが悔い改めなければならない理由を語ります。「それは、先にお選びになった一人の方によって、この世を正しく裁く日をお決めになったからです。神はこの方を死者の中から復活させて、すべての人にそのことの確証をお与えになったのです」。

この無知な時代が正しく裁かれ、正しく救われるために、神は一人の人をお選びになり、

この世に送ってくださった。パウロはそう語ります。私たちは、神様によって正しく救われるために、正しく裁かれなければなりません。裁きのないところには救いはないからです。裁きと救い、それは十字架と復活に象徴されます。イエス・キリストの十字架においてすべての人の罪が裁かれた。だから、復活による新しい命、救いが与えられたのです。

ところが、パウロが復活ということを語り出すと、そこにいた人々は、ある者はあざ笑い、ある者は、「それについては、いずれまた聞かせてもらうことにしよう」と、パウロの言葉をまったく受け入れませんでした。そこでパウロはその場を立ち去り、アテネを去ってコリントへ行くのでした。そこからが今日の聖書の箇所になります。

コリントは、ローマ帝国が栄えた時代に急速に繁栄した町でした。野心的なローマの市民が多く入ってきて町は急激な発展を遂げましたが、同時に道徳的な乱れも起こってきました。当時、この地域では「コリント風に生きる」という言葉が流行りましたが、それは、性的に乱れた生き方を表わす言葉として用いられました。それほどまでに乱れていたコリントの町にパウロは出かけていき、そこで福音を受け入れなかったユダヤ人たちから分かれて、パウロは異邦人に福音を宣べ伝えたのです。コリントではたくさんの成果も上がったことが、8節の後半に記されています。「コリントの多くの人々も、パウロの言葉を聞いて信じ、バプテスマを受けた」。一方で、急速に発展したコリントの町が道徳的に乱れたように、急激に大きくなったコリントの教会もたくさんの問題を抱えていきます。パウロが書いたコリントの信徒への手紙には、パウロの苦悩がとても深かったことが随所に記されています。たくさんの人が加えられていき、教勢が伸びていく教会を喜びながら、パウロはこの教会を、まことのキリストの教会としてどう建て上げていったらよいのか、迷っていったのではないのでしょうか。そんなとき、夢の中でパウロに御言葉が臨みます。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ」。

パウロはひょっとすると、大きくなればなるほどたくさんの問題を抱えていくコリントの教会の様子を見ながら、もうここでは御言葉を語らず、伝道もしないで、人がこれ以上増えない方がいいのかもしれない、と考えていたのかもしれませんが。人が増えれば増えるほど、たくさんの問題を抱えていくコリントの教会。心が萎えてしまいそうなパウロに、神様はこう伝えたのです。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ」。

恐れるな。これは、コリントの町の人たちのことではなく、大きくなればなるほどたくさんの問題を抱えていくコリントの教会への恐れを抱いていたパウロに対して語られた言葉でした。たくさんの人が集えば集うほど、教会の教勢が大きくなればなるほど、たくさんの問題が出てくる。けれどもそれを恐れずに、語り続けよ、黙っていてはならない、と主はパウロに告げたのです。なぜ恐れてはならないのか。なぜなら、そこには必ず、神様が共にいてくださるから。主なる神様は幻の中でそう語ってくださったのです。あなたが主の御用のために一生懸命に御言葉を語るなら、それで引き起こってくる問題については、主御自身が引き受けてくださる。主なる神様は、そう語られるのです。そして、主はさらにこう言われます。「この町には、わたしの民が大勢いるからだ」。まだ福音を聞いていない人たち、まだ信仰の決心が与えられていない人たちを、神様は「わたしの民」と言っ

てくださいます。この町には、私の民が大勢いる。だから恐れずに、御言葉を語り続けよ、黙っているな。そう主は言われるのです。

この神戸の地、垂水の町にも、主の民が大勢います。ですから、私たちもこの町で、恐れずに、主の福音を語り続けなければなりません。この神戸西教会は、教会組織から43年経ちましたが、この歴史は、主が御自身の民をこの礼拝へと招いてくださるために、福音をまだ聞いたことのない人たち、礼拝にまだ出たことのない人たちに、恐れずに語り続けてきた歴史です。この歴史をさらに発展させていくために、私たちも恐れずに語り続けていかなければなりません。なぜなら、この町には主の民がたくさんいるからです。主なる神様はここにいる私たち一人ひとりにも、こう語ってくださいます。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ」。この町にも、主の民が大勢いる。だから恐れずに、語り続けよ。黙っているな。私たちも、この言葉に励まされながら、この地で伝道活動を担っていきたいと願います。

お祈りしましょう。